

親園中学校では、充実した道徳の時間を確保すべく「ローテーション道徳」に取り組んでいます。各学年の職員が週替わりで各クラスで道徳の授業を行うというスタイルで、教科の授業とは違った生徒の一面も見られるというメリットがあります。生徒にとっても、毎回先生が変わるので、様々な授業スタイルで学ぶことができ、意欲的に取り組んでいます。

各学年の授業の様子、生徒の感想等の一部を「道徳だより」で保護者の皆様に発信していきますので、ご覧ください。

写真は、先日行われた親園中学校区研究授業としての、増居教諭による1年2組での道徳の研究授業の様子です。大勢の先生方の参観に、生徒たちはとても緊張していましたが、グループで話し合ったり、自分の考えを発表したりと、普段の活発な様子を見ていただくことができました。



◎ 1 学年の実践「いつもいっしょに」 主題名：友人との関係

授業者：粕谷

主人公の真理子は、仲良くしていたみゆきがバレーボール部のレギュラーになったときから以前のように付き合えなくなる。あるときから、同級生の恵子と由里の誘いでみゆきを無視するようになり、それによってみゆきはひとりぼっちになる。恵子が仲良しとされていた由里を批判するのを見て、真理子は自分のための本当の友達について考え、もう一度みゆきとやり直したいと思う。

生徒の感想（一部抜粋）

- ・自分も親友とけんかして困ったことがあって大変だったけれど、やはりけんかしてしまったら謝ることが大事。
- ・仲が良いほど言葉を考えて言う必要があると思う。
- ・その場の雰囲気にならなれない人になりたいと思った。
- ・悪いことをしている人に流されない。良いことか悪いことか判断する。
- ・自分の言動で、その人を救えたり傷つけたりできることを忘れずに生活する。
- ・けんかをして他人を巻き込まずに、自分たちだけで解決すること。
- ・友達を傷つけずに、だめなことはだめときちんと言えると、良い関係になれると思う。

◎ 2 学年の実践「道」の文化

主題名：礼儀の意義

授業者：鳩原

柔道部の卓也が、技が決まってガッツポーズをとった様子を顧問の先生に注意される。帰りの電車で茶道部の友美に会い、文化祭のお茶会に誘われる。そこで、卓也は茶道の文化に触れ、「礼に始まり、礼に終わる」という顧問の言葉を思い出し、柔道との共通点に気付く。そして、身が引き締まり、すがすがしい気持ちになっていく。

生徒の感想（一部抜粋）

- ・礼儀作法は、改めて自分を見つめることができるものだと思う。
- ・礼儀作法という日本の文化がずっと続いてほしい。
- ・周りの人の気持ちをよくすることができると思うので、自分も気をつけていきたい。
- ・自分の心を豊かにし、人との関係を整えてくれるものだと感じた。
- ・日本人として身につけなければならないと感じ、大切にしていきたい。
- ・日本の伝統で、日本にしかない文化だからこそ大切にしていきたいと思った。
- ・相手を大切に思っていることを態度や行動で表せるものだから大切。

◎ 3 学年の実践「ジャマナカめ」

主題名：挫折の先の自分

授業者：蓮實

IPS 細胞の研究でノーベル賞を受賞した山中伸弥教授のヒストリーである。山中教授は小さなころから、スポーツに取り組む際、けがをよくする選手であった。その経験から「スポーツでけがに悩む人を助けたい」と医者になることを決意。しかし、手術の技術が高いほうではなく「ジャマナカめ」と先輩より批判をあびる。その後も挫折を味わう「どうせなら誰もやらないことに挑戦する。」と決意。そして、IPS 細胞の研究への道へと進むのであった。

生徒の感想（一部抜粋）

- ・諦めずにその道を歩み続けても誰もが成功できるわけではないけれど、成功するにはその道は不可欠なのだと思う。漠然とした目標より、山中さんのように〇〇をしたい！という明確な目標の中から、誰もが努力をできるのではないかと考えた。
- ・頑張っている人は、頑張れる理由を持っている人なので、私もその理由をもって諦めることなく勉強をしていきたいと思いました。
- ・成功している人は、人生のすべてが成功しているように思えるけれど、その成功以上の失敗があって、今があるのだと思った。
- ・自分は、なんでも成功したいタイプなので失敗を恐れてしまい挑戦できていないので、これからは何事にも努力して自分のためになることをしていきたいと思いました。
- ・山中さんも今となっては、有名人ですごい方になったけど過去には辛い経験や努力したことがたくさんあったのだなと思いました。まずは実際にやってみることが大切だと思いました。